

海洋深層水の利活用促進に思う

山田勝久

(海洋深層水利用学会・利用促進委員会)

1. はじめに

私と海洋深層水利用学会との出会いは、2008年に東京海洋大学で開催された第12回東京大会に初めて参加したときでした。当時私は、会社が自ら伊東市で汲み上げた海洋深層水利用の研究開発を命じられたばかりでした。大学では海洋学を学んだ私の頭には、世界の海洋の平均水深がおよそ3,600 mと叩き込まれていたため、当学会の「200 m以深の海水」という定義には、些か違和感を覚えました。この定義については後日納得することになるのですが、「海洋深層水とは何なのか?」という疑問を抱きながら、海洋深層水の利活用研究という広い海原に出帆することになりました。

2. 海洋深層水利用学会

海洋深層水については全くの素人であった当時の私にとって、海洋深層水利用学会の存在は広い海原を進むための確かなコンパスに思えました。2009年に開催された第13回室戸大会には、拙速ながら3演題の研究発表を携えて参加しました。その後も発表演題を携えて第14回久米島大会にも参加しました。調子に乗ってそんなことを続けていたところ、いつの間にか2011年の第15回大会を伊東市で行うとの流れが浮上して来ました。学会の大会など開催したことのない私が、現地対応委員長に指名されました。すべてが初めての事なので困惑する中、地元の伊豆海洋深層水利活用組合ならびに伊東商工会議所の皆さんに多大なるお力添えを頂いて、無事に大会を終えることが出来ました。あの時のことを思い出すたびに、伊東市の皆さまには、今でも感謝の気持ちでいっぱいです。その後も当学会の大会には毎



回、研究発表を行いました。そして2015年の第19回久米島大会の頃には、利活用研究に着手した当時からの命題であった「海洋深層水とは何なのか?」に対する答えがおぼろげながら見えて来ました。またこの大会では、学会賞も頂きました。

第16回以降の大会では、そのテーマに研究を集中するとともに、派生した研究成果を化粧品や栄養学分野の学会にも発表してきました。

3. 海洋深層水利用学会利用促進委員会

先述の第15回伊東大会では、大会の前日の夕刻に「全国利用者懇談会」と称した討論会を企画しました。最後発の伊豆赤沢海洋深層水は、その利活用に関して素人であり、先行者の海洋深層水の利用に対する特許が存在して、利活用の可能性に不安を抱いていたからです。海洋深層水の利活用推進には、疑心暗鬼では進めません。その不安を解消して勢いよく突き進む必要を感じました。そこで大会に参加する専門家に、その不安や問題の解決方法を直接問いかける機会を作りたかったのです。全国の海洋深層水の取水地の利用者は、きっと学会大会は敷居が

高いと感じるでしょうから、大会当日の前日、日常のお仕事を終えた夕刻に開催することにしました。大会開催地のご理解を得て、参加費は無料となりました。活発な議論を期待して、キックオフの講演を皮切りに、質疑応答の時間を設けました。しかし大会でないとは言え、海洋深層水利活用に関する自らの不安や疑問を参加者の前で発言するには、とても勇気が必要でした。大会の開催地で催す全国利用者懇談会のあり方については、開催地との意見交換を重ねながら少しずつ内容を発展させて来ましたが、やがて新型コロナ感染拡大の時期を迎えます。2020年の第24回大会から2022年の第26回大会まで、Web開催となりましたので、開催地のない大会での全国利用者懇談会は中止せざるを得ませんでした。その間、利用促進委員会としては、利活用推進に関する2報の総説論文を当学会誌に投稿しました。新型コロナ禍明けの2023年、第27回大会が佐渡で現地とWebのハイブリッド形式で開かれました。当委員会活動の再出発にあたり、新しいテーマ「再発見！海洋深層水利活用」を掲げて3ヵ年計画を作りました。1年目の佐渡では「今改めて考える海洋深層水利活用への期待」、2年目の室戸では「今改めて考える海洋深層水利活用の現状と展望」そして3年目の入善では「今改めて考える海洋深層水利活用の社会実装」という内容で、全国の海洋深層水利利用者が参加し易いように、ハイブリッド形式で進めることになりました。さらに、2024年の室戸大会では、大会開催地である高知県と室戸市から大胆な企画が提案されて、「海洋深層水サミット」と冠して開催しました。この催しはマスメディアにも広く紹介されて、意義深い会になりました。なお、「海洋深層水サミット2024室戸大会」については、当委員会としてまた別の機会に詳しくお伝えしたく考えています。なお2024年は、別の意味でも記憶に残る年になりました。元旦に発生した能登半島地震の影響で、2025年に予定されていた入善大会は延期になったのです。これに代わって、久米島町が2025年の開催を快諾頂けることになりましたので、当委員会では現在、その内容の検討に着手したところです。「今改めて考える海洋深層水利活用の社

会実装」を久米島で実感できることを期待しています。

4. SDGs社会の到来と海洋深層水利活用

SDGsという文言を目や耳にしない日がないほど、今日の社会通念になっている持続性（連続性）のある社会の発展を目指す社会構造の構築。その実現に、海洋深層水は大いに役立つと考えています。これについては、当委員会活動の一環として総説論文を投稿しています。海洋深層水の利活用の要諦は、多段・多量利用にあると旧来から言われています。しかし実態は、そのようには進んで来ませんでした。現在までのところ、沖縄県久米島町と富山県入善町を除いた他の海洋深層水の取水地では多段（カスケード）利用が進んでいないのが現実です。この問題については、当学会の産学公連携推進委員会（深見委員長、放送大学高知学習センター長）がフォーカスして活動を始めています。当委員会も産学公連携推進委員会としっかり繋がって、海洋深層水の利活用促進に働きかけたいと思います。

5. おわりに

私がこの学会に参加してから、早や16年の歳月が経ちました。この間に新たに学会に加入した若者は少なく、学会員の平均年齢は右肩上がりになっています。当学会を維持して、活性化して行くためには、若者の参加が必携です。そのためには、若者たちに当学会の魅力を感じてもらう必要があります。若者との文化や言語にさえ、障壁を感じる今日この頃ですが、前項のSDGsは、価値と言語を共有できる概念です。若者に対する海洋深層水の啓発は、当学会の学習推進委員会（大塚委員長、海洋深層水利利用学会会長）が、主に小学生に対して海洋深層水の存在を見る、知る、触るという活動で認識を広げています。何とかこの機会に、海洋深層水のカスケード利用を社会実装して、日本の素晴らしさと自信を若者に実感してもらいたいと思います。

かく言う私も現役をリタイヤする年齢となりまし

た。しかし海洋深層水の利活用を通じて日本が世界に先駆ける自然エネルギー利用国となることを目指す気持ちに衰えはありません。きっと先輩たちも同じ気持ちでしょう。

最後に、若者のみなさんにお願ひがあります。まだこうした先輩たちが居る間に、海洋深層水利用学会に参加して活動してください。どうぞよろしくお願ひします。